

讀叢版

日本現代文學
全集

北原白秋
三木露風集
日夏耿之介



日本現代文學全集・講談社版

38

北原白秋
三木露風
日夏耿之介
集

編 集 整
伊 藤 郎
龜 井 勝
中 村 光
平 野 夫
山 本 健 吉

日本現代文學全集

38

北原白秋・三木露風・日夏耿之介集

編集

伊藤整
龜井勝一郎
中村光夫
平野謙
山本健吉



昭和38年11月10日 印刷
昭和38年11月19日 發行

定價 500圓

© KODANSHA 1963

著者
北原白秋
三木露風
日夏耿之介

發行者 野間省一

印刷者 北島織衛

發行所 株式會社 講談社

東京都文京區音羽町3～19
電話東京 (942) 1111(大代表)
振替東京 3 9 3 0

印刷製本
寫版製本
真印
大日本印刷株式會社
株式會社 興陽社
株式會社 大進堂
株式會社 岡山紙器所
株式會社 第一紙藝社
株式會社 石井
株式會社 石井
日本クロス工業株式會社
日本加工製紙株式會社
本州製紙株式會社
安倍川工業株式會社
三菱製紙株式會社
神崎製紙株式會社

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします

北原白秋集 目次

卷頭寫眞
筆蹟

邪宗門	七
思ひ出	四七
雪と花火(抄)	一〇六
畑の祭(抄)	一二三
眞珠抄	一二三
白金ノ獨樂(抄)	二八
第二白金ノ獨樂(抄)	三三
水墨集(抄)	三三
海豹と雲(抄)	三三

第二海豹と雲(抄)	三三
新頌(抄)	三九

桐の花	一四一
雲母集(抄)	一六四
雀の卵(抄)	一七
黒檜(上卷)	一八
桐の花とカステラ	一〇四
晝の思	一〇六
詩集月に吠える序	一〇九
愛の詩集のはじめに	一一

齋藤茂吉選集序	二六
石川啄木選集序	三〇
『思ひ出』増訂新版について	三三
『桐の花』増訂新版について	三六
黒衣の旅びと——折口さんの歌について——	三九
與謝野寛先生	三〇
作品解説	四〇八
北原白秋入門	四四
年譜	四四
参考文献	四四三

三木露風集 目次

卷頭寫眞

筆蹟

廢園……………三七

寂しき曙(抄)……………三七

白き手の獵人……………三七五

幻の田園(抄)……………三三

良 心(抄)……………三〇四

蘆間の幻影(抄)……………三〇六

信仰の曙(抄)……………三〇九

表現の精神……………三二〇

調和の詩人 芭蕉の事……………三二

作品解説……………山本健吉 四三

三木露風入門……………伊藤信吉 四六

年譜……………四三

参考文献……………四四五

日夏耿之介集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

轉身の頌……………三七

黒衣聖母……………四三

咒 文……………三七

大 鴉……………六二

日本近代詩崖見……………六四

圓右のやうな芥川君……………六三

日本的詩歌の形式に關する偶談……………五五

鷗外その日本的造立……………三九

作品解説……………山本健吉 四三

日夏耿之介入門……………伊藤信吉 四三

年 譜……………四六

参考文献……………四六

北
原
白
秋
集

い
ふ
の

ふ
く

同

い
ふ
の

青
い
わ

い
ふ
の

い
ふ
の
い
ふ
の
い
ふ
の

邪 宗 門



父上に獻ぐ

父上、父上はじめ望み給はざりしかども、
児は遂にその生れたるところにあこがれて、
わかき日をかくは歌ひつけ候ひぬ。もはや
もはや咎め給はざるべし。

邪宗門扉銘

ここ過ぎて曲節の憫みのむれに、
ここ過ぎて官能の愉樂のそのに、
ここ過ぎて神經のにがき魔睡に、

詩の生命は暗示にして單なる事象の説明には非ず。かの筆にも言語にも言ひ盡し難き情趣の限なき振動のうちに幽かなる心靈の歎歎をたづね、經游たる音樂の愉樂に傾かれて自己觀想の悲哀に誘はる、これわが象徴の本旨に非ずや、されば我らは神祕を尙び、夢幻を歡び、そが腐爛したる頭唐の紅を慕ふ。哀れ、我ら近代邪宗門の徒

が夢寐にも忘れ難きは青白き月光のもとに歎歎く大理石の嗟嘆也。暗紅にうち濁りたる埃及の濃霧に苦しめるスフィンクスの腫也。あるはまた落日のなかに笑へるロマンチツシユの音楽と幼兒殺の前後に起る心狀の悲しき叫也。かの黄臘の腐れたる絶間なき瘰癧と、オロン^{オロン}の三の絃を擦る嗅覺と、曇硝子にうち響ぶウキスキイの鋭き神經と、人間の腦髓の色したる毒艸の匂深きためいきと、官能の魔睡の中に疲れ歌ふ鶯の哀愁もさることながら、仄かなる角笛の音に逃れ入る緋の天鵝絨の手觸の棄て難さよ。



例言

一、本集に收めたる六章約百二十篇の詩は明治三十九年の四月より同四十一年の臘月に至る、即最近三年間の所作にして、集中の大半は殆昨一年の努力に成る。就中『古酒』中の「よひやみ」「柑子」「晩秋」の類最も著くして『魔睡』中に載せたる「室内庭園」「曇日」の二篇はその最も新らしきものなり。

一、予が眞に詩を知り初めたるは僅に此の二三年の事に屬す。されば此の間の前後に作られたる種々の傾向の詩は皆予が初期の試作たるを免れず。従て本集の編纂に際しては特に自信ある代表作物のみを精査し、少年時の長篇五六及その後の新舊作七十篇の餘は遺憾なく割愛したり。この外百篇に近き『斷草』と『思出』五十篇の著作あれども、紙數の制限上、これらは他の新らしき機會を待ちて出版するの已むなきに到れり。

一、予が象徴詩は情緒の諧樂と感覺の印象とを主とす。故に、凡て予が據る所は僅かなれども生れて享け得たる自己の感覺と、刺戟苦き神經の悅樂とにして、かの初めより情感の妙なる震慄を無みし只冷かなる思想の概念を求めて強ひて詩を作爲するが如きを嫌忌す。されば予が詩を讀まむとする人にして、之に理知の闡明を尋ね、幻想なき思想の骨格を求めむとするは謬れり。要するに予が最近の傾向はかの内部生活の幽かなる振動のリズムを感じ、その儘の調律に奏でいんとする音樂的象徴を專とするが故に、それが表白の方法に於ても概ねかの新らしき自由詩の形式を用ゐたり。

一、或人の如きは此の如き詩を嘔ひて甚しき誇張と云ひ、架空なる空想を歌ふも

のと做せども、予が幻覺には自ら眞に感じたる官能の根柢あり。且、人の天分にはそれそれ自らなる相違あり、強ひて自己の感覺を尺度として他を律するは謬なるべし。

一、本來、詩は論ふべききはものにはあらず。嘗て幾多の譏笑と非議と謂れなき誤解とを蒙りたるにも拘らず、予の單に創作にのみ執して、一語もこれに答ふる所なかりしは、些か自己の所信に安じたればなり。

一、終に、現時の予は文藝上の如何なる結社にも與らず、又、如何なる黨派の力をも恃む所なき事を明にす。要は只これらの羈絆と掣肘とを放れて、予は予が獨自なる個性の印象に奔放なる可く、自由ならんことを欲するものなり。

一、尙、本集を世に公にする事を得たる所以のものは、これ一に蒲原有明、鈴木鼓村兩氏の深厚なる同情に依る、ここに謹謝す。

明治四十二年一月

著者識

魔睡

余は内部の世界を熟視めて居る。陰鬱な死の

節奏は絶えず快く響き渡る……と神經は一齊に不思議の舞踏をはじめ。すすりなく黒き薔薇、歌うたふ硝子のインキ壺、誘惑の色あざやかな猫眼石の腕環、笑ひつづける空眼の老女等はこまかくしやかな舞踏をいつつでもつづける。余は一心に熟視めて居る……いつか余は朱の房のついた長い剣となつて渠等の内に舞踏つてゐる……長田 秀雄

毒草のかげを走り疲れし繡青き蜥蜴の悲しみを知る人ありや。わがころはあき日紅く曇りし瀟江の空にそとなく下りゆく風船のけはひに驚かされ、兒供の河岸に泣かす人形の聲に刺されて、何ならぬ氣分の惱ましきをも味ひぬ。かの強き油繪具に倦み、狂ほしき管絃樂にかきみだされしあとに、何時しかわが求めしは捉へがたきある句のムウダなりき。かの氣分の、わきがたき陰影のなやみなりき。あはれ、樂しき一夜を躍り疲れし Dancer の襟おしろいの汗のゆかしさ。

邪宗門秘曲

われは思ふ、末世の邪宗、切支丹でうすの魔法。

黒船の加比丹を、紅毛の不可思議國を、色赤きびいどろを、句鋭きあんじやべいにる、南蠻の棧留縞を、はた、阿刺吉、珍葩の酒を。

目見青きドミニカびとは陀羅尼誦し夢にも語る、禁制の宗門神を、あるはまた、血に染む聖骸、芥子粒を林檎のごとく見すといふ欺罔の器、波羅韋僧の空をも覗く伸び縮む奇なる眼鏡を。

屋はまた石もて造り、大理石の白き血潮は、ぎやまんの壺に盛られて夜となれば火點るといふ。

かの美しき越歴機の夢は天鵝絨の薫にまじり、珍らなる月の世界の鳥獸映像すと聞けり。

あるは聞く、化粧の料は毒草の花よりしぼり、腐れたる石の油に畫くてふ麻利耶の像よ、はた、羅甸、波爾杜瓦爾らの横つづり青なる假名は美しき、さいへ悲しき歡樂の音にかも満つる。

いざさらばわれらに賜へ、幻惑の伴天連尊者、百年を刹那に締め、血の磔脊にし死すとも惜しからじ、願ふは極祕、かの奇しき紅の夢、善主鷹、今日を祈に身も靈も薫りこがるる。

室内庭園

晩春の室の内、

暮れなやみ、暮れなやみ、噴水の水はした

たる……

そのもとにあまりりす赤くほのめき、

やはらかにちらほへるヘリオトロオプ。

わかき日のなまめきのそのほめき、静ころなし。

盡きせざる噴水よ……

黄なる實の熟るる草、奇異の香木、

その空にはるかなる硝子の青み、

外光のそのなごり、鳴ける鶯、

わかき日の薄暮のそのしらべ、静ころなし。

いま、黒き天鹅絨の

にほひ、ゆめ、その感觸……噴水に縫れ

たゆたひ、

うち濕る草の函、饅ゆる褐色、

その空に暮れもかかる空氣の吐息……

わかき日のその夢の香の腐蝕、静ころなし。

三層の隅か、さは

腐れたる黄金の縁の中、自鳴鐘の刻み……ものなべて惱ましき、盲ひし少女の

あたたかに匂ふかき感覺のゆめ、わかき日のその露に音は響く、静ころなし。

晩春の室の内、

暮れなやみ、暮れなやみ、噴水の水はした

たる……

そのもとにあまりりす赤くほのめき、

甘く、また、ちらほひぬ、ヘリオトロオプ。

わかき日は暮るれども夢はなほ静ころなし。

陰影の瞳

夕となればかの思曇硝子をぬけいでて、

廢れし園のなほ甘きときめきの香に頼へつ

つ、

はや簠え萎ゆる芙蓉花の腐れの紅きものか

げと、

縫れてやまぬ秦皮の陰影にこそひそみしか。

如何に呼べども静まらぬ瞳に絶えず涙して、

歸るともせず、密やかに、はた、果しなく

見入りぬる。

そこともわかぬ森かげの鬱、憂の薄闇に、

ほのかにのこる噴水の青きひとすぢ……

赤き僧正

邪宗の僧ぞ彷徨へる……暗据ゑつつ、黄昏の藥草園の外光に浮きいでながら、

赤赤と毒のほめきの恐怖して、頼へ戦く、

陰影のそこはかとなきおほろめき

まへに、うしろに……さはあれど、月の

光の

水の面なる葦のわか芽に頼ふ時。

あるは、需ふる遠方の窓の硝子に

ほの青きソロのピアノの咽ぶ時。

暗据ゑつつ身動がず、長き僧服

爛壞する暗紅色のにはひしてただ暮れなや

む。

さて在るは、曇に吸ひたる

Hachischの毒のめぐりを待てるにか、

あるは激しき歡樂の後の魔睡や忍ぶらむ。

手に持つは黒き梟

爛爛と眼は光る……

……そのすそに蟋蟀の啼く……

WHISKY

夕暮のものあかき空、

その空に百舌啼きしきる。

Whiskyの銀の列

冷やかに拭く少女、

見よ、あかき夕暮の空、

その空に百舌啼きしきる。

天鵝絨のにほひ

やはらかに腐れつつゆく暗くらの室。
その片隅の薄あかり、背にうけて
天鵝絨の赤きふくらみうちかつぎ、
にほふともなく在るとなく、蹲み居れば。

暮れてゆく夏の思と、向日葵の
凋れの甘き香もぞする。……ああ見まもれ
ど

おもむろに悩みまじらふ色の陰影
それともわかね……熱病の闇のをのき……

Hachach か、酔か、茴香酒か、くるほし

く
溺れしあとの日の疲勞……纏れちらぼふ
Wagnerの戀慕の樂の音のゆらぎ
耳かたぶけてうち透かし、在りは在れども。

それらみな素足のもとくらがりに
爛壞の光放つとき、そのかなしみの
腐れたる曲の縁を如何にせむ。

君を思ふとのたまひしゆめの言葉も。

わかき日の赤きなやみに織りいでし
にほひ、いろ、ゆめ、おほろかに嗅ぐとな
けれど、

ものやはに暮れもかぬれば、わがこころ
天鵝絨深くひきかつぎ、今日も涙す。

濃霧

濃霧はそそぐ……腐れたる大理の石の
生くさく吐息するかと蒸し暑く、
はた、冷やかに官能の疲れし光——
月はなほ夜の氣圍氣の籠なる恐怖に懸る。

濃霧はそそぐ……そこに蟲の神經
鋭く、甘く、壓しつぶさるる嗟嘆して
飛びもあへなく耽溺のくるひにぞ入る。
薄ら闇、盲啞の院の角硝子暗くかがやく。

濃霧はそそぐ……さながらに戦く窓は
亞刺比亞の魔法の館の薄笑。
痲痺藥の酸ゆき香に日ねもす噎せて
軋したる、はた、盲ひたる圓頂閣か、壁の
中風。

濃霧はそそぐ……甘く、また、重く、く
るしく、

いづくにか凋れし花の息づまり。
苑のあたりの泥濘に落ちし燕や、
月の色半死の生に悩むごとただかき曇る。

濃霧はそそぐ……いつしかに蟲も盲ひつ
つ

軋したる光のそこにうち痺れ、
啞とぞなる。そのときにひとつの硝子
幽魂の如くに青くおぼろめき、ピアノ鳴り
いづ。

濃霧はそそぐ……數の、見よ、人かげう
ごき、
関ぐる夜の恐怖か、痛きわななきに
ただかいさぐる手のさばき——靈の彈奏、
盲目弾き、啞と軋者圓ら眼に重なり覗く。

濃霧はそそぐ……聲もなき聲の密語や。
官能の疲れにまじるすすりなき
靈の震慄の音も甘く軋しゆきつつ、
近き野に喉絞めらるる淫れ女のゆるき痙攣。

濃霧はそそぐ……香の腐蝕、肉の衰頹、
呼吸深く嚔囃仿謨や吸ひ入るる
軋たる暑き夜の魔睡……重く、いみじく、
音もなき盲啞の院の氣圍氣に月はしたたる。

赤き花の魔睡

日は眞晝、ものあたたかに光素の
波動は甘く、また、緩く、戸に照りかへず、
その濁る硝子のなかに音もなく、
嚔囃仿謨の香ぞ滴る……毒の謠言……

遠く聴く、電車のきしり……………

……………棄てられし水薬のゆめ……………

やはらかき猫の柔毛と、蹠の
ふくらのしろみ惱ましく過ぎゆく時よ。

窓の下、生の痛苦に只赤く、戦ぎえたてぬ

草の花

亜鉛の管の

濕りたる寛のすそに……………いまし魔睡す……

麥の香

嬰兒泣く……………麥の香の濕るあなたに、

續け泣く……………やはらかに、なやましげに

も、

香に噫び、香に噫び、あはれまた、嬰兒泣

きたつ……………

夏の雨さと降り過ぎて

新にもかをり蒸す野の畑いくつ濕るあなた

に、

赤き衣一きは若く、にほやかにけふる搖籃

や、

腐硝子、あるは窓枠、濡れ濡れて夕日さし

そふ。

曇日

曇日の空氣のなかに、

狂ひいづる樟の芽の鬱 憂よ……………

そのもとに桐は咲く。

Whiskyの香のごときしぶき、かなしみ……

……

そこここにいぎたなき駱駝の寢息、

見よ、鈍き綿羊の色のよこれに

饑えて病む囊のくさみ、

その濕る泥濘に花はこぼれて

紫の薄き色鋭になげく……………

はた、空のわか葉の威壓。

……

いづこにか、またもきけかし。

餌に饑えしベリカンのけうとき叫、

山猫のものさやぎ、なげく驚、

腐れゆく沼の水蒸すがごとくに。

……

そのなかに桐は散る……………Whiskyの強き

かなしみ……………

もの甘き風のまた生あたたかき、

猥らなる獸らの園内のあゆみ、

のろのろと枝に下るなまけもの、あるは、

貧しく

眼を据あて毛蟲啄む嗟歎のほろほろ鳥よ。

……

そのもとに花はちる……………桐のむらさき……

……

かくしてや日は暮れむ、ああひと日。

病院を逃れ來し患者の恐怖、

赤子らの眼のなやみ、笑ふ黒奴、

酔ひ痴れし遊蕩兒の縦覽のとりとめもなく。

……

その空に桐はちる……………新しきしぶき、か

なしみ……………

はたや、また、國の外ゆく……………

軍樂の黒き不安の壞れ落ち、夜に入る時よ。

やるせなく騒ぎいでぬる鳥獸、

また、その中に、

狂ひいづる北極熊の水なす戦慄の聲。

……

その間に花はちる……………Whiskyの香の頻吹

……桐の紫……………

秋の瞳

晩秋の濡れにたる鐵柵のうへに、

黃なる葉の河やなぎほつれてなげく……………

やはらかに葬送のうれひかなでて、

過ぎゆきしTribuneいづちいにけむ。

……

はやも見よ、暮れはてし吊橋のすそ、

瓦斯點る……………いぎたなき馬の吐息や、

騒ぎやみし曲馬師の樂屋なる幕の青みを

ほのかにも掲げつつ、水の面見る女の瞳。

……

空に眞赤な

空に眞赤な雲のいろ。
 玻璃に眞赤な酒のいろ。
 なんでこの身が悲しから。
 空に眞赤な雲のいろ。

秋のをはり

腐れたる林檎のいろに
 なほ青きにほひちらほひ、
 水薬の汚みし卓に
 瓦斯焔爐ほのかに燃ゆる。

病人は肌をさめて
 愁はしくさしぐむごとし。
 何ぞ湿る、醫局のゆふべ、
 見よ、ほめく劇薬もあり。

色牙えぬ室にはあれど、
 聲たててほのかに燃ゆる。
 瓦斯焔爐……空と、こころと、
 硝子戸に鈍ばむさびしさ。

しかはあれど、寒きほのほに
 黄の入日さしそふみぎり、
 朽ちはてし秋のギオロン
 ほそほそとうめきたてぬる。

十月の顔

顔なほ赤し……うち曇り黄ばめる夕、
 『十月』は熱を病みしか、疲れしか、
 濁れる河岸の磨硝子脊に凭りかかり、
 霧の中、入日のあとの河の面をただうち眺
 む。

そことなき權のうれひの音の刻み……
 涙のしづく……頬にもまたゆるきなげき
 や……

やありて麴包の破片を手にも取り、
 さは冷やかに噛みしめて、來るべき日の
 味もなき悲しきゆめをおもふとき……

なほもまた廉き石油の香に喰ひ、
 腐れちらばふ骸炭に足も汚れて、
 小蒸汽の灰ばみ過ぎし船腹に
 一きは赤く輝やきしかの窓棹を忍ぶとき……

月光は早やもさめざめ……涙さめざめ……
 ……
 十月の暮れし片頬を
 ほのかにもうつしだいしぬ。

接吻の時

薄暮か、
 日のあきあけか、
 晝か、はた、
 ゆめの夜半にか。

そはえもわかね、燃えわたる若き命の眩暈
 赤き震慄の接吻にひたと身顫ふ一刹那。

あな、見よ、青き大月は西よりのぼり、
 あなや、また瘡病む終の顫して
 東へ落つる日の光、
 大空に星はなげかひ、
 青く盲ひし水面には薬香にほふ。

あはれ、また、わが立つ野邊の草は皆色も
 干乾び、
 折り伏せる人の骸の夜のうめき、
 人靈色の
 木の列は、あなや、わが挽歌うたふ。

かくて早や、落穂ひろひの農人が寒き瞳よ。
 歡樂の穂のひとつだに残さじと、
 はた、刈り入る鐮の刃の痛き光よ。
 野のすゑに獸らわらひ、
 血に饅えて汽車鳴き過ぐる。

あなあはれ、あなあはれ、
二人がほかの靈のありとあらゆるその呪詛。

朝明か、

死の薄暮か、

晝か、なほ生れもせぬ日か、
はた、いづれともあらばあれ。

われら知る、赤き唇。

濁江の空

腐れたる林檎の如き日のにほひ
圓らに、さあれ、光なく甘げに沈む
晩春の濁重たき靄の内、
ふと、カキ色の輕氣球くだるけはひす。

遠方の曇れる都市の屋根の色
たゆげに仰ぐ人はいま鈍くも聴かむ、
濁江のねぶたき、あるは、やや赤き
にほひの空のいづこにか洩るる鐵の音。

なやましき、さは江の泥の沈澱より
あかるともなき灰紅の帆のふくらみに
傳へくる潜水夫が作業にか、
饅えたる吐息そこはかと水面に黄ばむ。

河岸になほ物見る子らはうづくまり、
はや倦ましげに人形をそが手に泣かす。

日暮どき、入日に濁る靄の内、
また、ふくらかに輕氣球くだるけはひす。

魔國のたそがれ

うち曇る暗紅色の大き日の
魔法の國に病ましげの笑して入れば、
もの甘き驢馬の鳴く音にもよほされ、
このもかものに惱ましき吐息ぞおこる。

そのかみの激しき夢や忍ぶらむ。
鬱黃の百合は血ににじむ眸をつぶり、
人間の聲して挑み、飛びかはし
鸚鵡の鳥はかなしげに翅ふるはす。

草も木もかの誘惑に化されつる
旅のわかうど、暮れ行けば心ひまなく
えもわかぬ毒の怨言になやまされ、
われとかなしき歡樂に怕れて顫ふ。

日は沈み、たそがれどきの空の色
青き魔藥の薰して古りつつゆけば、
ほのかにも誘はれ来る隊商の
鈴鳴る……あはれ、今日もまた恐怖の豫
報。

はとばかり黙み戦くものの息。
色天鵝絨を擦るとき裳裾のほかは
聲もなく甘く重たき靄の闇、

はやも王女の領らすべき夜とこそなりぬ。

蜜の室

薄暮の潤みにごれる室の内、

甘くも腐る百合の蜜、はた、靄ほかし
色赤きいんくの縷のかたちして
ひそかに點る豆らんぶ息づみ曇る。

『豐國』のぼやけし似顔生ぬるく、
雲硝子の窓のそと外光なやむ。

ものの本、あるはちららばふ日のなげき、
暮れもなやめる靈の金字のにほひ。

接吻の長き甘さに倦きぬらむ。

そと手をほどき、靄の内さぐる心地に、
色盲の瞳の女うらまどひ、
病めるペリカンいま遠き濕地になげく。

かかるとき、おぼめき摩るViolonの
なやみの絃の手觸のにほひの重さ。

鈍き毛の絨氈に甘き蜜の闇
濃み饅えつつ……血のごともらんぶは消
ゆる。

酒と煙草に

酒と煙草にうつとりと、
倦めるこころを見まもれば、

それとしもなき靈のいろ
曇りながら泣きいづる。

なにか嘆かむ、うきうきと、
三味に燦けるわがころ。
なにか嘆かむ、さいへ、また
靈はしくしく泣きいづる。

鈴の音

日は赤し、窓の上に恐怖の鳥
ひた黙み、暮れかかる沙漠を熟視む。

今日もまた、もの鈍き駱駝をつらね、
一群のわがやから消えさりゆきぬ。
もの甘き鈴の音、ああそを聴けよ。

からら、からら、ら、ら、ら……

暮れのこるピラミドの暗紅色よ。

そが空のうち濁る重き空氣よ。

いづこにか月の色ほのめくことし。

からら、からら、ら、ら、ら……

かの群よ、靄ふかく、いまか、ひろぐる
色鈍き、幽鬱の毛織の天幕。

駱駝のためいきもそこはかとなく。

からら、からら、ら、ら、ら……

もの青く暮れてみな蒸しも見わかれ。

鬱え温るむ空のをち、薄らあかりに、
ほのかにも此方見るスフィンクスの瞳。

からら、からら、ら、ら、ら……

あはれ、その静かなるスフィンクスの瞳。
ああ暗示……えもわかね夢の象徴。
またくいま埃及の夜とやなるらむ。

からら、からら、ら、ら、ら……

鳥いま、はたはたと遠く飛び去り、
窓にただ色あき燈火點る。

夢の奥

ほのかにもやはらかきにほひの團生。

あはれ、そのゆめの奥。日と夜のあはひ。

薄あかる空の色ひそかに顫ひ、

暮れもゆくそのしばし、聲なく立てる

眞白なる大理石の男の像、

微妙じくもまた貴に瞑目りながら

清らなる面の色かすかにゆめむ。

ものなべてさは妙に女の眼ざし

あはれそが夢ふかき空色しつつ、

にほやかになやましの思はうるむ。

そがなかに埋もれたる素馨のなげき、

蒸し甘き沈丁のあるは刺せども

なにほどの香の痛み身にしおほえむ。

わかうどは聲もなし、清く、かなしく。

薄暮にせきもあえぬ女の吐息

あはれその慈如し、しぶく噴水

そことなう節ゆるうゆらゆるなべに、

いつしかとほのめきぬ、月の光も。

その空に、その苑に、ほのの青みに

静かなる歎歎泣きもいでつつ、

いづくにか、さまだるる愛慕のなげき。

やはらかきほの熱る女の足音

あはれそのほめき如し、燃えも生れゆく

ゆめにほふ心音のうつつなきかな。

大理石の身の白み、面もほのかに、

ひらきゆくその眼ざし、なかな閉ぢつつ、

ゆめのごと空仰ぎ、いまだぞ見惚るる、

色若き夜の星、うるむ紅。

窓

かかる窓ありとも知らず、昨日まで過ぎし

河岸。

今日は見よ。

色赤き花に日の照り、かなしくも依依兒句

ふ。

あはれまた病める Piano……

昨日と今日

わかうどのせはしきよ。